

抑制メロンの栽培技術の確立

第1報 品種と播種期

志茂正人・石田栄一 (鹿児島県農業試験場)

Masato SHIMO and Eiichi ISHIDA : Delayed Cropping Technique of Melon.

1. The Adaptabilities of Cultivar in the four Sowing times

鹿児島県のメロンの栽培面積は合計 335 ha で、半促成栽培が 186 ha と最も多く、次いでトンネル早熟栽培が、149 ha で春作の栽培が多い。品種はネット型メロンではアンデス、ノーネット型メロンでは、バンビー、パパイヤ、プリンスなどである。

本県は秋季温暖で晴天に恵まれることからメロンの秋作には好適の条件にあるが、現段階では 5 ha 程度で少ない。春作の栽培環境は低温短日条件から高温長日条件に向うのに対し、秋作では高温長日条件から低温短日条件に向うので春作の環境条件とは異なる。そこで品種と播種期について検討したので、第1報として報告する。

1. 試験方法

供試品種は、ネット型メロンの‘真珠100’ほか7品種を供試して、播種期7月25日(定植期8月13日)、8月5日(8月25日)、8月15日(9月6日)、8月25日(9月17日)の4回播種して、立作り親づる1本仕立の1果穫りとした。7月25日播き、8月5日播きは無加温としたが、8月15日播き、8月25日播きは最低夜温15°Cとして加温を行った。

2. 結果および考察

草勢を地上部重でみると、播種期別では播種期が早いほど地上部重は重くなる傾向がみられた。播種期別の平均気温は、7月25日播き:26.8°C、8月5日播き:25.2°C、8月15日播き:24.4°C、8月25日播き:23.6°Cとなり、平均地温も播種期が遅れるに従って降下し、7月25日播きの26.0°Cに対し、8月25日播きは20.9°Cとなった。この気温、地温の差異が地上部の生育に影響したものと考えられる。品種では‘南勝アールス’が各播種期とも草勢がおう盛であったが、‘ボルガ’は草勢が弱かった。

健全雌花発生率は着果節位の12~15節について調査したが、7月25日播きは他の播種期に比較して低く、‘南勝アールス’の場合、7月25日播きの71.9%に対しほかの播種期は84.4~87.5%であった。

12~15節の雌花の花芽が分化する本葉4~5葉期の日最高気温の平均は7月25日播きでは、38.9°Cで最も高く、健全雌花の発生を低くした大きな要因と考えられる。

果重は品種によって8月5日播きを除くと、傾向としては播種期が遅くなるに従って小さくなる傾向がみられた。‘南勝アールス’の場合、7月25日播き:1694g(100)に対し、8月5日播き:1544g(91)、8月15日播き:1459g(86)、8月25日播き:1008g(60)となった。品種では‘南勝アールス’、‘真珠100’が大きかった。

肥大期の平均気温は7月25日播き:26.5°C、8月5日

播き:25.0°C、8月15日播き:23.7°C、8月25日播き:22.6°Cで温度の影響が大きいものと考えられる。

葉重と果重との関係を葉重/果重でみると、播種期には関係なく品種により同一傾向がみられた。‘秋系アールス’は0.47~0.57、‘ボルガ’は0.27~0.33であった。またLAI/果重でも同様な傾向がみられた。

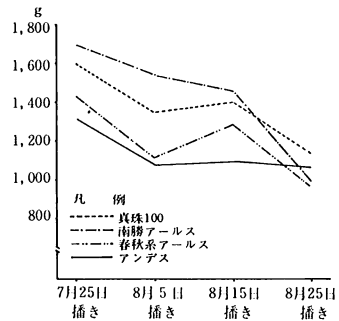
ネットの発現は、品種ではネット量、ネットの盛り上がりよりみて、‘真珠100’、‘南勝アールス’がよかった。播種期による差は少なかった。

糖度は、‘アンデス’、‘真珠100’、‘南勝アールス’、‘春秋系アールス’、‘アールス東海PF90’、‘ボルガ’は播種期が遅くなるに従って高くなる傾向を示したが、‘秋系アールス’、‘秋冬系アールス’は播種期による差はみられなかった。

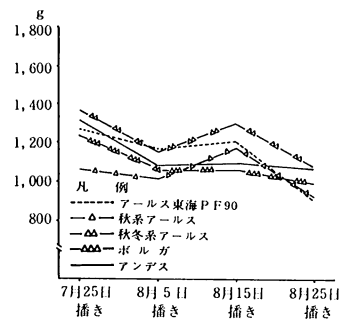
全般に品種では‘アンデス’が高かった。

以上総合して、抑制作型では果重は播種期が遅くなるに従って小さくなる傾向にあった。糖度は‘秋系アールス’、‘秋冬系アールス’を除く品種は播種期が遅くなるに従って高くなる傾向がみられた。

この実験の結果では各播種期とも‘真珠100’、‘南勝アールス’がすぐれた。



第1図-1) 果重の変化



第1図-2) 果重の変化